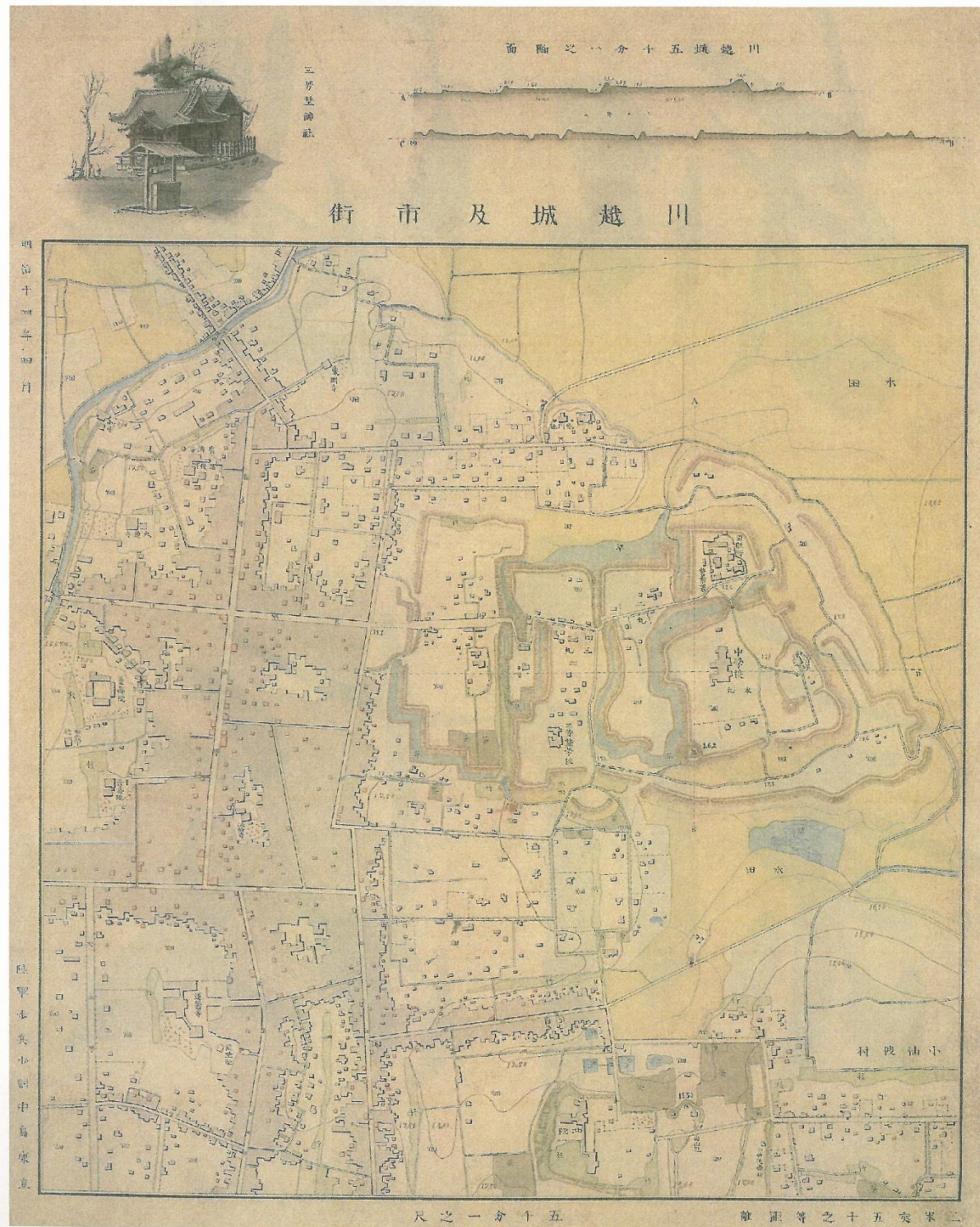


地図でみる川越の地理歴史と川越高校

本文P54～P59参照

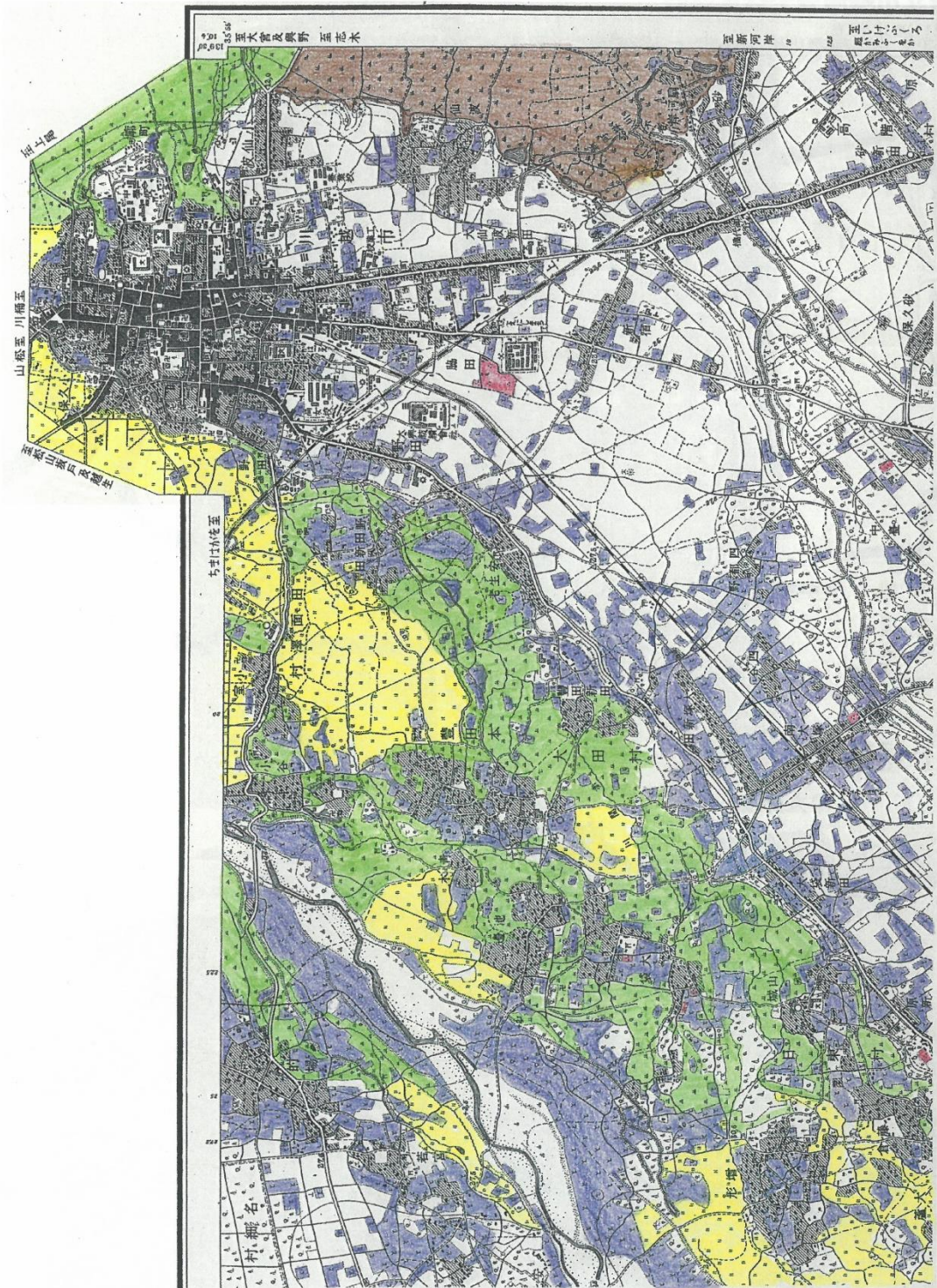
1 明治前期（明治14年＜1881＞）

岡村 能成



この地形図は明治14年作成のフランス式迅速測図（縮尺2万分の1を縮小、絵画的彩色図）で、陸軍にとって近代的地図がないことは、各地の反乱（明治10年西南戦争）を抑える上で障害になると考え作成された。城跡など一部を除き建造物などは示されていない。なお翌15年からは三角測量を使ったドイツ式に変更され単色図になった。

●川越「土地利用図」



大正12年（1923）に作成された地形図をもとに土地利用を色別すると、川越市街地周囲の沖積平野は、沼田（茶色=泥田）、水田（緑色=蓮田）、乾田（黄緑=普通田）になる。よって、旧川越城の北側や東側は湿地帯であり、防衛性が強力であったことがうかがえる。なお武蔵野台地上や西側の入間川の自然堤防には、絹織物の原料となる桑畑（紫色）が多くみられる。
※茶畑（赤色）以外の台地上は畑地と混合林地

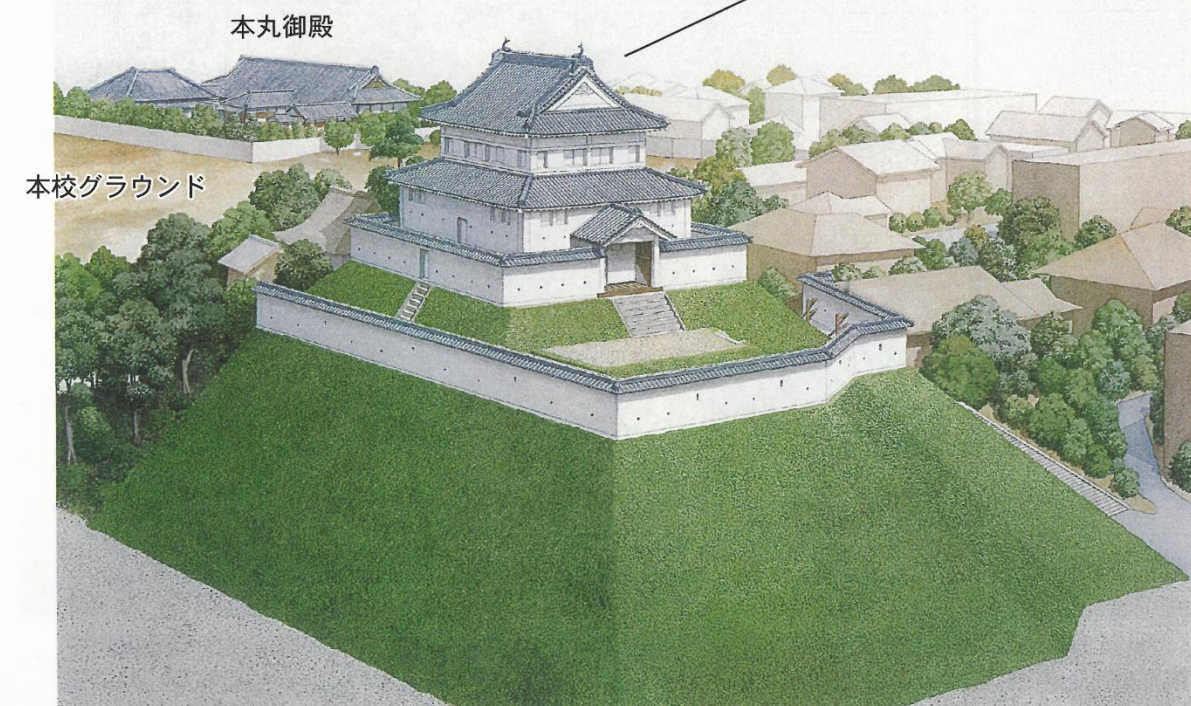
●川越城内平面図

埼玉県立川越高等学校位置図

1999(平成11)年10月現在
1867(慶応3)年 川越城概略図(川越市立博物館トレース図)より復元



●富士見櫓復元図



富士見櫓復元イメージ図(明治2年・廃城)

(「川越城」川越市立博物館・平成23年)

●川越城復元模型(川越高校郷土部製作)

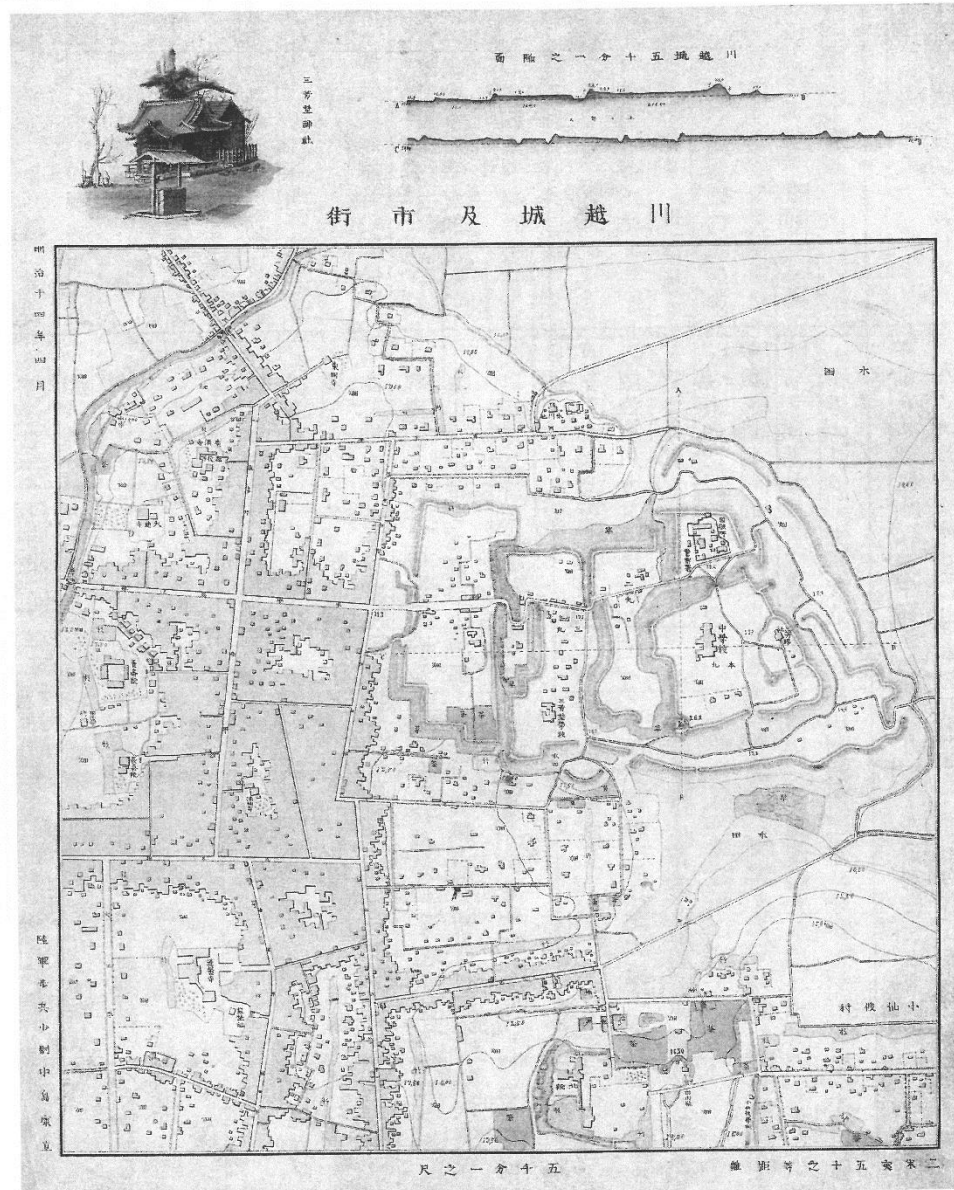


地図でみる川越の地理歴史と川越高校

口絵カラー P2～P6参照

1 明治前期（明治14年＜1881＞）

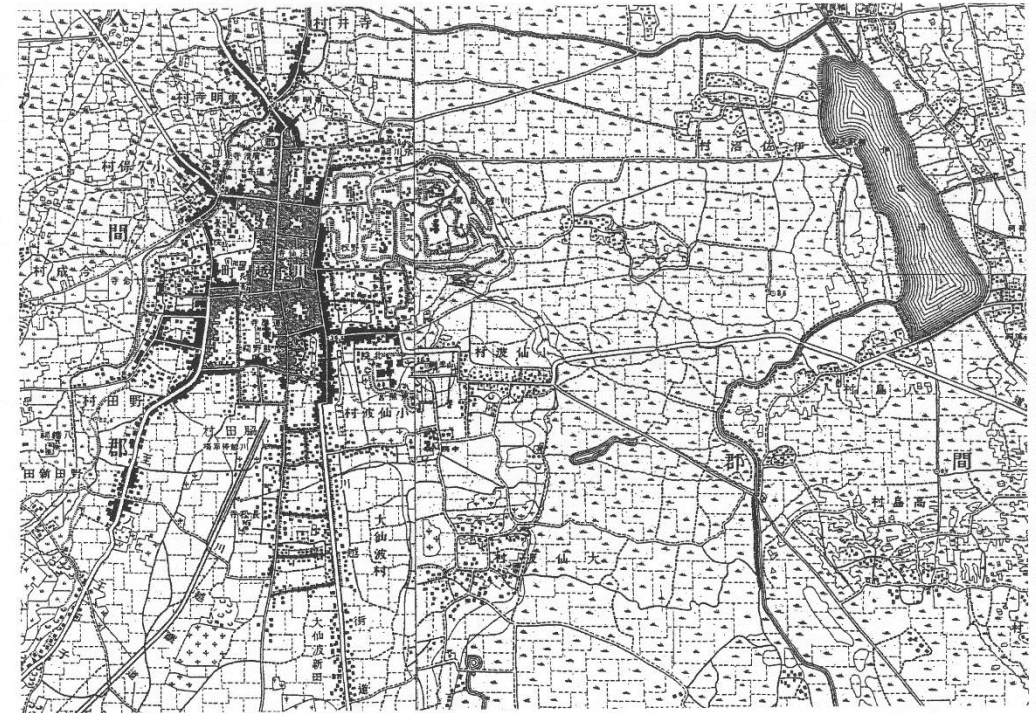
岡村 能成



明治元年（1868）の大政奉還で幕政時代が終わりを告げ、同4年の廃藩置県により、川越は埼玉県の前身である川越県から入間県の県庁所在地になる。翌年学制が公布され、幕末までの藩校や寺子屋・私塾が変わって小学校が創られた。図中の三芳塾学校（旧家老屋敷内）とは、士族が教師になって授業を受け持った小学校（現川越第一小）で、生徒数はおよそ250人（女子50人）ほぼ士族の子弟であった。14年には本町大手前に洋式の公立小学校（現川越小）が新築されている。図中からは、北院（喜多院）の周囲には大規模な茶園がみられ、伝承されている狭山茶の原点「河越茶」を思わせる。また現川越市立博物館の場所には、城内の土手に囲まれた警察署があった。なお城郭を除いたこの図中の市街地が川越の旧町内である。

本丸御殿に記載された中學校は、明治14年開校で本校の前身である埼玉県下初の郡立（入間・高麗）中学校である。この学校には、福澤諭吉の婿養子で日本の電気事業の創設に関わった後の福澤桃介（現吉見町出身）が在籍していた。地図からは現在の校舎（二丸）付近は畑であり、正門付近が内濠にあたる。この濠を埋立てる際、二丸・三丸の標高の違いから、正門付近には今に残る斜面ができた。濠は図中に「草」と記されており空堀であったと思われる。また校舎付近は、武家の守護神を祀った八幡社があったので、八幡曲輪（郭）といわれた。この「曲輪（郭）」は、城内の平地の一區画をいい、現在の本校の住所にも「郭町」として使われている。

2 明治後期（明治29年＜1896＞）



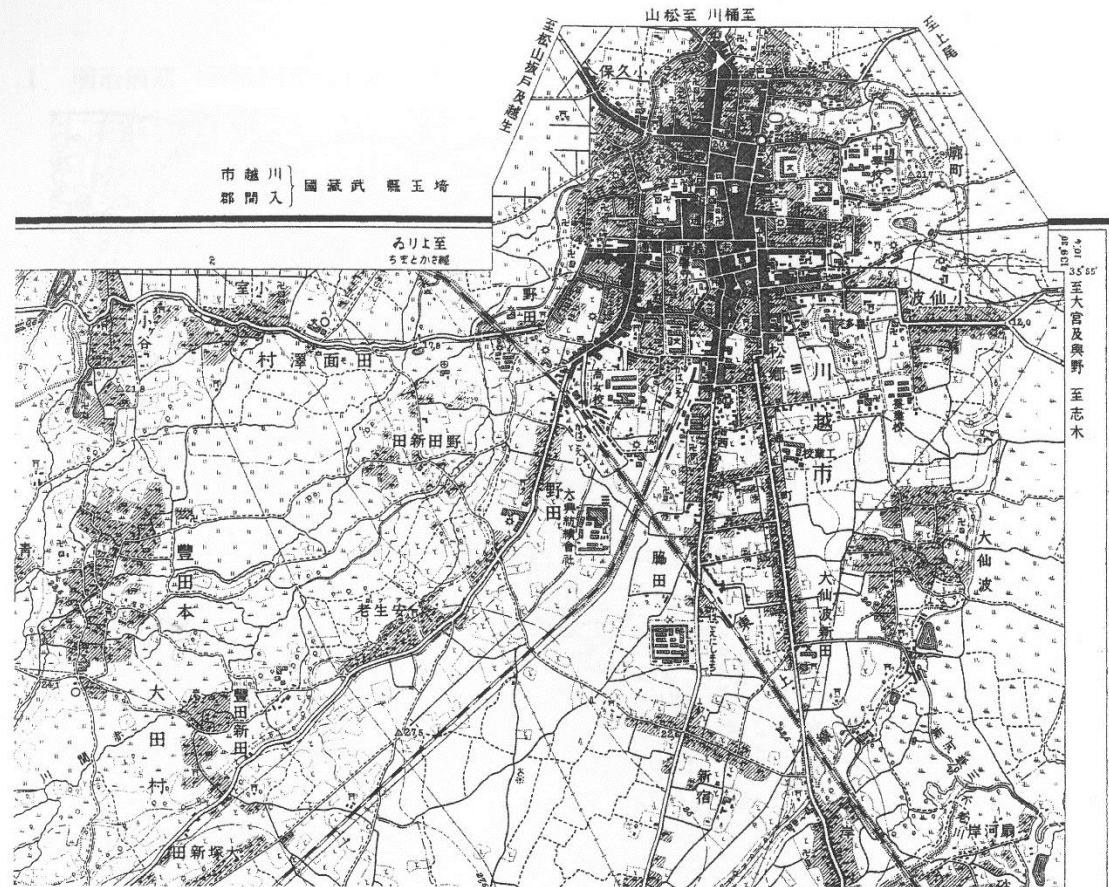
（「川越」・「平方村」2万分の1を縮小・陸軍陸地測量部）

明治憲法が公布された明治22（1889）年県下初の町制を敷いた川越は、人口約18,000の商都であった。小江戸・川越の代名詞である『蔵造りの町並み』が出現する契機となった川越大火が起こったのは、明治26年で北西の季節風が吹く春3月ことである。この火災は、図中にある「養寿院」前より出火し、県下最大規模を誇った旧町内（現『一番街』付近・口絵カラー P 6 参照）の市街地約3割（1,300戸）の家屋が焼失した。図中にはその復興の中で翌年開通する川越鉄道（現西武新宿線）の路線が描かれており、川越停車場（現本川越駅）付近は、まだ畑作の農業地域であった。旧町内北側の廣済寺には㊦の記号があり、明治初年から郡役所が置かれていた。城下町特有の「鍵の手」型の道路や川越街道沿いの路村形態も読み取れる。また武蔵野台地の北端を回るように流れる小河川（赤間川）は、当時、今より面積が2倍近くあった伊佐沼に流入していた。なお伊佐沼から新河岸川の源流が流れ出ていたが、図の中央下には新河岸舟運の水路がみえる。

川越城の地形的形状は、「大坂城」と大変よく似ている。海沿いと内陸部の違いはあれ、台地の半島状に突き出た北端に城や城下町が形成され、その周囲三方（西・北・東）が海や河川の低湿地帯になっていた。「大坂城」は防御性が高い難攻不落の城であったが、川越城も天守はないもの（富士見櫓あり）、江戸を守る北の要として防御性は大変優れていた（口絵カラー P 3・4・5 参照）。

本校は浦和・熊谷に次いで、明治32（1899）年「埼玉県第三中学校（3年後に埼玉県立川越中学校）」として川越城内に開校する。入学生は試験によって選抜された119名で、このうち優秀な39名が飛び級で2年生となった。生徒の大半は川越の町内出身者であったが、川越鉄道の完成で現西武線地域の生徒の交通の便が確保され、川島のほか入間・飯能方面の生徒も多かった。また更に交通不便地の生徒には、寄宿舎が設けられていた。なお開校当初の卒業生のうち約半数が上級学校に進学し、教員や医師・技術研究職・会社員などをめざしていた。

3 大正・昭和初期（昭和2年<1927>）



（「川越」2.5万分の1を縮小・陸軍陸地測量部）

大正11年（1922）埼玉県初の市制施行は川越で人口は約2.5万人、第二位熊谷の約1.5万人を大きく引き離していた。翌年関東大震災があったが、武蔵野台地上の旧町内の被害は軽微であった。図中には大正3年に開通した東上鉄道（現東武東上線）が描かれているが、駅名は府中道の西町にできたため、現川越駅は「川越西町」といった。現西武線の線路際には、川越への工業進出の先駆けとなった大興紡績（後の日清紡）の工場がみられる。なおこの場所への立地は、原料や製品等の輸送の利便性によるもので、工場と線路の間には特別のホームを設けられていた。本校の南側には、県下初の電車として開業した川越電気鉄道（久保町駅－大宮駅＜明39～昭16＞）の線路や駅舎が読み取れる。駅北側には石炭による火力発電所の記号があり、久保町駅の線路はループ状であったこともわかる。江戸と川越を結んだ新河岸川の舟運は、鉄道開通以前の明治末までが最盛期で、昭和6年埼玉県より通船停止令が出でその役目を終了した。図中には大仙波下に大きな池があり、そこが船着き場である。鉄道開通にともない4年には、県内最初のゴルフ場が霞ヶ関に開場している。また8年には、旧町内の鍵の手型の道路が交通不便であり、蓮馨寺境内を南北に貫いて、今の『中央通り』ができた。この完成により旧町内の市街地と南の鉄道各駅とが幹線道路として結ばれた。図中には高女校（川越女子・明治39年開校）、工業校（川越染色学校→川越工業・明41）、蚕業校（川越農業→川越総合・大9）とよばれた各県立学校の名前がみえる。※口絵カラーP3参照

昭和6年4月野球部：春の選抜中等学校野球大会に出場（埼玉県勢初の甲子園出場）。
野本定主将が開会式選手宣誓行うも、試合は準優勝した愛知中京商業に0対11で敗戦。
※同年8月北関東大会からの帰途、川越電気鉄道の脱線転覆事故に遭遇し、部員に死傷者が出て甲子園連続出場を絶たれる。また同10年野球部長で強豪校の土台を築いた飯田亮先生が死去するという悲しみを味わう（後に今に残る飯田先生の胸像を野球場脇に建立）。
昭和11年本校出身の鈴木間多選手がベルリンオリンピックの陸上100m・400mリレーに出場（同選手の100mのベストは10' 6）。※鈴木選手は翌年日中戦争で戦死（享年27）。
昭和20年8月15日の終戦玉音放送は、多くの生徒が勤労動員先で聞く。

4 昭和中期（昭和27年<1952>）

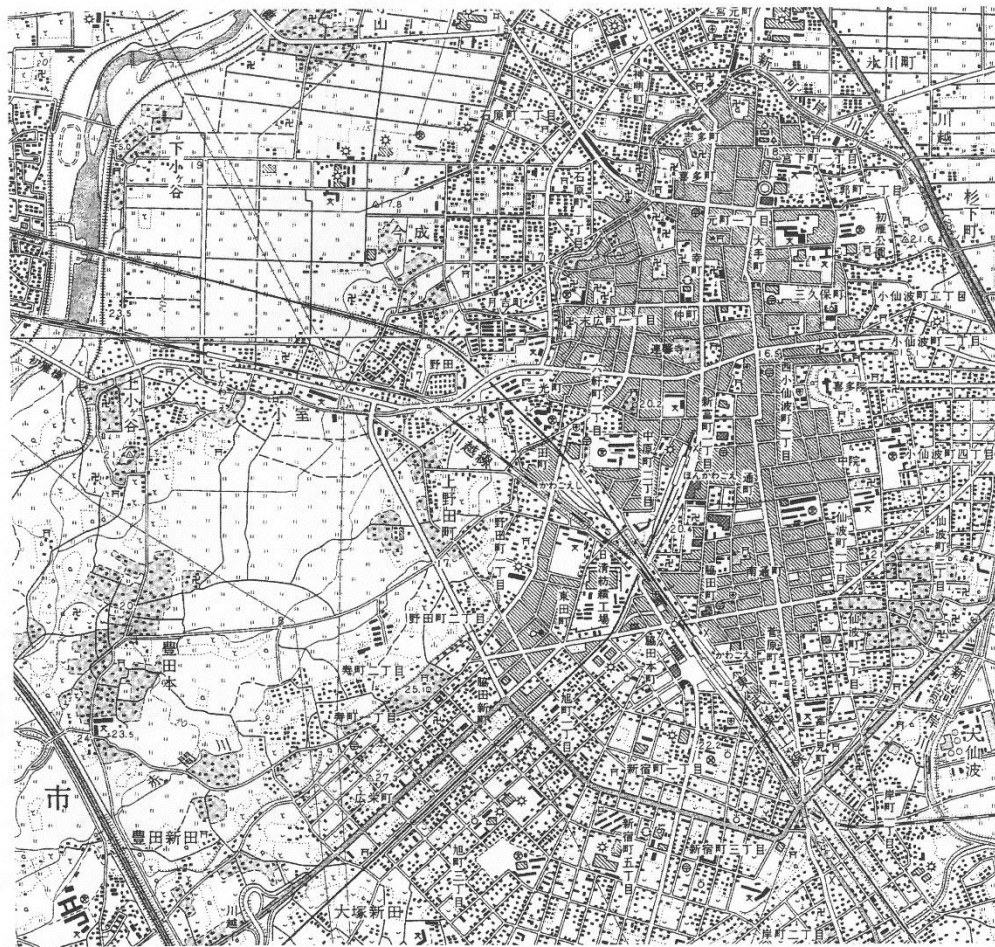


（「川越」2.5万分の1を縮小・建設省地理調査所）

川越市の戦争被害は、軍事・工業施設が少なかったため大きな被災を免れた。昭和15年鉄道省川越線の開通にともない、川越駅や本川越駅が生まれる（川越電気鉄道は廃線）。戦後、旧町内の商店街を『一番街（商業協同組合）』と命名するが、飯能から丸広百貨店が進出し昭和39年（1964）には新富町に本店を構えて、駅周辺の新しい商都・川越の基盤がつくられる。この時代、江戸町・同心町・大工町・鍛冶町（口絵カラーP6参照）など城下町の由緒ある地名が町名変更で消滅する。逆に高度経済成長の中、当時日本一といわれた川越狭山工業団地が操業を開始し、46年関越自動車道の練馬－川越間が開通・49年国道16号川越環状線が完成して、本格的モータリゼーションの時代に入る。また、郊外には住宅団地が続々完成してベッドタウン化し、人口も40年代後半には20万人を超える。なお本校北側の現川越市立博物館の敷地には、川越商業高校（大正15年開校・現市立川越高校、後に南部の新宿町に移転）の「文」記号がみえる。新河岸川は大幅改修で北側の赤間川とつながった。

- 本校では文武両道精神が戦後も引き継がれ、各部活動でその黄金時代を迎える
- 昭和23年 旧制川越中学（5年制）から新制川越高校となる
- 昭和24年 庭球部（ソフトテニス）：芹沢・岡田組が兵庫県立神戸高校を倒して全国制覇
- 昭和27年 陸上部：全国高校駅伝で3位の偉業（前年も全国6位）
- 昭和34年 野球部：西関東大会で甲府工業に2対1で勝利し夏の甲子園大会出場
全国大会戦績1回戦熊本鎮西高校3－1、2回戦高知商業0－1
- 昭和37年 弁論部：NHK『青年の主張』全国大会で山川一陽君が演題「民主主義の原理」で第一位（弁論部活動は最盛期であり各大会での優勝をさらった）
- 昭和38年 団塊の世代の入学で本校最大の539名が新入生として入学
- 昭和39年 音楽部：NHK音楽コンクールで全国第一位
- 昭和41年 公認50メートルプールが完成して木原光知子東京オリンピック選手らを招待
- 昭和44年 大学に続く高校の学園紛争の最中、「生徒心得」が廃止され、自主的民主的活動を保証した「生徒憲章・生徒規約」が成立（今の制服の自由化につながる）

5 昭和後期（昭和56年<1981>）



（「川越北部」・「川越南部」2.5万分の1を縮小・建設省国土地理院）

昭和50年前後から『一番街』商店街の衰退や旧町内の高層マンション建設に危惧を持った市民や商店主らが、町並み保存や建設反対運動を展開し、行政に代わって建物の保存と街の活性化に大きな役割を果たした。なかでも昭和52年（1977）『一番街』の煙草卸商「万文」の蔵造り建物内部を「蔵造り資料館」として公開させ、川越のランドマーク「時の鐘」とともに川越観光の拠点にすえた（現在までに菓子屋横丁の整備・川越まつり会館の建設などが続く）。57年川越市への観光客は年間約150万人であったが、翌年さらなる川越活性化のためNPO「川越蔵の会」が発足した。この会は英国発祥のナショナルトラスト（歴史的・自然的景観保護）運動であり、その後の全国的町並み保存活動に影響を及ぼした。60年埼京線が電化されて川越まで延伸し、東京との繋がりがさらによくなる。また埼玉医科大学川越総合医療センターが開設されるなど、市内のインフラ整備も進む。郊外の農村は近郊農業地帯となり、川越の代名詞であったサツマイモに変わって、葉物野菜などの栽培が盛んになった。なお図中左下の関越高速道路脇には、埼玉県立川越南高校（50年開校）が創立された。

昭和50年 排球部：全国選抜大会に出場（1回戦奈良添上高校2-1、2回戦高崎商業1-2）
昭和51年 ハワイで開催の日米対抗ゴルフジュニア選手権で金谷多一郎君が優勝
（後に大学の学生チャンピオンになりプロ選手の道へ）
昭和52年 3年生を送る予餞会にシンガーソングライター・中島みゆきが来校
（この時代の予餞会には他校と異なり若手有望アーティストを招いて開催）
生徒会主催の講演会で直木賞作家・野坂昭如氏来校
（この時代から大手新聞社論説委員や大学学長・本校OBらの講演会を開催）
昭和60年 音楽部・ソフトテニス部が全国大会出場
昭和62年 第二次ベビーブームのより1学年11学級の超大規模校になる

6 現在（平成20年<2008>）



（「川越北部」・「川越南部」二・五万分の一を縮小）
国土交通省国土地理院

平成2年（1990）人口が30万を超え、川越駅前に複合商業ビル「アトレ」が完成。3年本川越駅ステーションビルPePe（プリンスH）が開業。4年には『一番街』の電線地中化が完了し、本格的観光都市の道を歩み始め、観光客数は増加の一途をたどる（約350万人）。一方『一番街』に近接する通称「銀座通り」は、アーケード商店街として賑わってきたが、市街地南部の駅周辺に集客力を奪われていった。そのためやはり商店街の電線地中化を行い、残存していた大正時代的建物を生かし『大正浪漫夢通り（商業振興組合）』の名称でリニューアルを図った。11年には『一番街』の「蔵造りの町並み」がグッド（アーバン）デザイン賞や重要伝統的建造物群保存地区に選定される。16年にはJR川越駅ビル「ルミネ」が開業し、新富町通り一帯は「クレアモール」ともよばれ、県内最大級の活況を呈するようになった。20年地下鉄有楽町線、25年同副都心線が東急東横線・横浜みなとみらい線と東上線の相互乗り入れを開始。その結果、横浜中華街まで直通運転となり、観光の集客力範囲や利便性が拡大する。21年にはNHK朝の連続テレビ小説「つばさ（多部未華子主演）」の舞台が川越となる。26年川越の観光客数は約650万人（うち川越祭が97万人）で、これは沖縄県への観光客に匹敵する。またボンネット型観光用巡回バスも運転され、『小江戸』川越は関東でも屈指の観光都市となり外国人も多数来訪するようになった。現在、自治体と商店街・市民・「川越蔵の会」という官民が一体となった新しい街づくり（中央通りの『昭和の街』構想）やイベントが模索され、『城下町』川越の発展・進化は佳境を迎えようとしている。なお、入間川左岸（図中左上）の旧跡「河越館跡」が、中世武蔵国の武士団筆頭格「河越氏」の拠点で、太田道灌の川越城築城以前の中心地である。

平成元年 新聞部：全国高校新聞コンクールで最優秀賞（第一位）の朝日新聞社賞を受賞
平成2年 地学部：同部探検隊が火山洞窟学会等と富士山麓青木ヶ原樹海で新洞窟を発見
平成6年 本校卒の奥泉光氏が「石の来歴」で芥川賞受賞
平成11年 豪クイーンズランド州ケアンズのStオーガスティンズ高校と姉妹校提携
平成13年 本校水泳部をモデルとした映画『ウォーターボーイズ』が公開
※シンクロナイズドスイミングは昭和61年「くすのき祭」に初登場以来今の盛況に続く
平成18年 文部科学省よりスーパーサイエンスハイスクール（SSH）に指定される
※理科の各種全国大会での優勝・上位入賞や世界大会への出場が続く
平成22年 本校卒の沖方丁氏が歴史小説「天地明察」で本屋大賞受賞（後に映画化）
平成27年 本校卒の梶田隆章氏が「ニュートリノ振動の発見」でノーベル物理学賞受賞